中西伊之助と対馬

中西伊之助研究会
幹事　水谷修

はじめに

筆者は、今年（06 年）６月「伊之助と母、そして二人と伊万里・対馬と朝鮮を考える」という小文を書いた。そして､06 年８月「中西伊之助の足跡と対馬戦跡探訪の旅」に行った。今回はその対馬調査をふまえ「伊之助と対馬」について考えてみたい。

海軍要港部修理工場で職工だった伊之助

中西伊之助は「愛讀者への履歴書」に、没落していった中西家にあって「十六の頃から、鐵道の機關車掃除夫になつたり、陸軍火薬製造職工などになつた。日露戦争の當時、對馬竹敷で職工をして、戦争の威怖を受けた。が、その『労により、金三拾圓』を賜つた。その時は全くうれしくてたまらなかつた。」と書いている。

伊之助は日比谷焼打ちに参加し四谷警察署に一晩はいっている。したがって、伊之助が対馬にいたのは、1903 年から 1904 年２月の一年間、満１６歳から１７歳の間だと思われる。

伊之助はこの１年間に、キリスト教布教に奮闘し、初恋をし、廃娼運動に立ち上がった。対馬での１年間が、彼の人生の方向を決定する重要な時期になったであろう。

伊之助が働いた「竹敷修理工場」は海軍要港部にあった。竹敷には 1886 年に水雷施設部、1893 年に海軍防備隊、そして、1896 年に海軍要港部が設置された。国内最初の「要港」が設置された。竹敷には、日露戦争，日本海海戦をにらんで、造船所など軍施設がつぎつぎ建設され、往時は人口 2000 人を突破し、飲食店・各種商店もひしめいたという。花街もあった。いまは静かな漁村になっている。軍事拠点であった面影と言えば、現在、海上自衛隊対馬防備隊本部があるだけだ。私たち中西伊之助研究会の一行は同本部も訪問し、冷茶をいただき丁寧な挨拶を受けた。

港にたつ旧要港部正門跡の碑

海上自衛隊対馬防備隊本部

発見。修理工場跡

石積み岸壁などの石造施設群（石護岸、石締切堤、石ドック）は戦争遺跡であるとともに、近代建築遺跡としても重要である。

私たちは、地元の研究家であり「語り部」である小松津代志さんのご教示で、ドック跡地に辿り着いた。実は私たちだけで探した時は、狭い入り口の道が分からず辿り着けなかったのだが、小松さんの説明によって、翌日探し当てることができたのである。

場所（対馬市美津島町竹敷深浦）は深く切れ込んだ入り江の奥の奥に位置し、水雷艇隠し場所であり、格好の軍事的修理工場であったろう。跡地はいま「塩工場（KK白松の塩）」になっている。お土産までいただいた。筆者がいただいた「藻塩」は絶品でそれだけでご飯が美味い。このドックが、かつて伊之助が汗して働いた「修理工場」であるに違いない。

海軍要港部当時の石積み護岸

余談だが、私は伊之助が働いた宇治火薬製造所の赤煉瓦（写真右）を一つ持っている。このドックの石積みが一部剥離していたのでその石（写真左）を対馬から持ち帰った。

伊之助、キリスト教の伝道師となる。

伊之助がクリスチャンになったのは対馬であった。

『我が宗教観』には次のように記されている。「私の十七歳の時、私の勤めてゐた或る工場の同僚の中に、熱心なクリスチャンがあつた。それは、京橋教會の田村直臣牧師から洗禮を受けた石橋夫妻であつた。はじめて基督教を私に勵ましてくれた人は、この人であつた。」「その混亂する小さい港町の中で、石崎夫妻と、基督教會を建設しようと云ふのである。彼等の罪悪になづんで

今は「塩工場」になっている海軍修理ドック跡（パノラマ１８０度）

ゐる靈魂を、どうしても救はなければならないと躍氣になつたのであつた。しかし、その小さい港町には、たしかに數千人の男女が住んでゐたが、基督教徒は、私と石崎夫婦とたつた三人きりであつた。」「私はそれから、勇ましく伝道に出かけた。路傍に立つて、辻説法をはじめた。がいつも、失敗した。」とある。

伊之助たち３人は新たなキリスト教徒を獲得することができなかった。しかし、対馬で最初のキリスト教布教活動をしたのが伊之助たちであるようだ。

厳原聖ヨハネ教会のHPの「厳原聖ヨハネ教会の歩み（1905年７月～）」によれば、「対馬に聖公会の宣教が初めてなされたのがいつかは正確にはわからないが、1905年以前から無教派の家庭集会という形で、キリスト教の集会が行われていたようである。厳原聖ヨハネ教会では、当時の主教エビントン師が来島された1905年７月をもって、聖公会の宣教開始としている。」とある。

伊之助が対馬にいたのが1905年２月までなので、対馬での最初のキリスト教伝道者は伊之助と石崎夫妻なのかもしれない。

伊之助、廃娼運動に立ち上がる。

バイタリティあふれる伊之助は、対馬で廃娼運動に立ち上がっていた。

『我が宗教観』には次のように書かれている。「そこへ、反對に、大問題が起つた。それは、この町に、今までなかつた、遊郭が置かれると云ふことであつた。私たちは驚いた。ーー神の王國である教會は容易に建設されなくなつて、却つて『悪魔の王國』が建設されるのである！　／私たちは、起つた。石崎夫婦と共に、そこの警察署へ不許可の指令を興へてくれと云ふ請願書を出した。」「遊郭は、山手一帯の高燥な地に、皮肉にも宏壯な建物となつて現はれた。そして、私たちの教會は、いつ建つとも思はれなかつた。人間は、『神の王國』より『悪魔の王國』を好むものだと云ふ、最も平凡な眞理を、私は、十七歳の少年時代に、はじめて、はつきりと感銘した。」

伊之助は「最も初期の、廃娼運動家」だっだ。

伊之助の初恋

伊之助の初恋は対馬であった。

「夢多き頃」に「人並に戀があつた。」として次のように書いている。

「職長の娘に、私と七つ下の子がゐた。私の十七八の頃から彼女の母は、私にその娘をくれると云ふやうなことを云つてゐた。踊りなども教へてゐたし、姿も人形のやうに美しかつた。私はいつかその娘を思ふようになつた。／十九の時、東京へたつたが、彼女は十二の「女らしさ」の仄見える娘であつた。それから私は五六年間、彼女と手紙の往復をしてゐるうちに、二人は語らずして結婚することに定めてしまつた。」「彼女が十八になつた頃、お互の親の間に結婚談がとり交された。彼女と私の双方の熱心な運動の結果だつた。私はその頃新聞記者だつた。」

だが、伊之助の義父の反対で破談になってしまう。彼女は銀行家と結婚し、台湾銀行支店長夫人になるのであった。

伊之助初恋の地はどこか。「私の十七八の頃」とある。また１９歳で東京にたつ前に働いていた工場であるのだから対馬だろう。伊之助初恋の舞台は対馬に相違ない。

海軍兵学校入学めざし、対馬から東京へ

「愛讀者への履歴書」によれば、「数へ年十九の時に、海軍兵学校へはいる準備のため貯金をもって、東京へ苦学するつもりで出た。大成中学校五年級に編入、兵学校は、私が私生児だといふので入れてくれなかつた。」とある。

海軍兵学校に入るために東京へ出るが、戸籍の問題で挫折するのである。

伊之助と母の愛

「愛讀者への履歴書」に「日露戦役の労に依り、一金三十圓下賜」されたとあるが、「夢多き頃」では「十九の二月、百圓の貯金をもって東京へ出てきた」としている。100円と30円の差額がある。この差額の多くは母親が用立てしたと筆者は推察する。

『赭土に芽ぐむもの』にはつぎの場面がある。「彼がＴへ立つ時、母は涙を流して、『勉強してえらい人になっておくれ・・』と彼を励ました。」とある。上の母タネとの写真（1905年17歳）はそのときの写真であろう。

『我が宗教観』には「その後、私の二十一の頃一年ばかり、私は母のそばにゐた。それから二十二三になつて、再び母のそばにゐた。」とある。伊之助は陸軍伏見工兵第十六大隊に入営するのだが、その直前の満２０歳の頃、母親と一年間暮らしていることになる。それは伊万里なのではないだろうか。その後、伊之助は朝鮮に渡ることになるが、それも母親をたよってのものであった。母親はすでに朝鮮で商売をしていたのだろう。

伊之助１３歳のとき、母親が伊万里に嫁ぎ、親子は別れざるを得なかった。１７歳

1907年５月20歳の伊之助（入営前の写真？）

で母を訪ねて伊万里へ向かい、対馬に渡った。１９歳で海軍兵学校めざし上京する前に母親の激励を受け、２０歳で入営する前に母親と暮らした。２２歳で母親をたよって朝鮮に渡った。と、筆者は推察する。

青年伊之助の人生の岐路にはいつも、母親の姿がある。

（※旧字がなくて一部分新字での引用になっている。）

2006 年 9 月　宇治市議会議員　水谷修

対馬の戦争遺跡と日韓交流（旅の記録）

06 年 8 月末に敢行した「中西伊之助の足跡と対馬戦跡探訪の旅」には、中西伊之助研究会から、勝村誠代表、秦重雄氏、大和田茂氏、山崎恭一氏と筆者が参加した。

対馬では、郷土史家で対馬の歴史と観光の語り部の小松津代志さん、芳州外交セミナー交流会日本側代表の吉野哲さんにお会いし夜遅くまで交流し、深く広いご教示をいただいた。

対馬市議会議員の武本哲勇さんには２日間のガイドをお願いし、多くの勉強をさせていただいた。心から感謝したい。

対馬各地の砲台跡など戦争遺跡は、文部科学省の指定を受けているが十分な保全がされているとはいえない。そんな中にあって対馬の人たちが、努力し記録がまとめたり、掲示板を設置している。

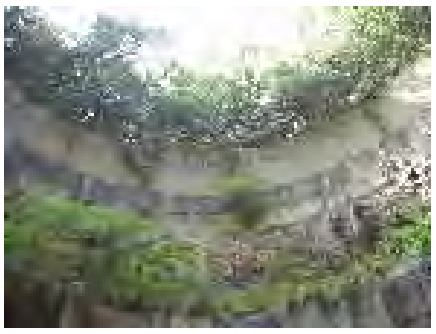
また、海峡ネットから参加された、日本語日本文化学科の張竜傑（チャンヨンゴル・慶南大学副教授）さん、日本の領土政策の第一人者である崔長根（チェジャングン・大邱大学）さん、日本現代文学研究者の趙正民（チョジョンミン）さん、朝鮮通信使研究者の金愛景（キムエギョン・立命館大学大学院）さん、日本語講師の金貞蘭（キムジョンラン・韓国海洋大学）さん、立命館大学学生の宋 (ソン）ウニョンさんと２日間ごいっしょに調査し、おおいに日韓交流もおこなった。

■恩海義きょう (めぐみのうみ , ぎはたかし) の碑 (きょうは漢字がなかった。山＋喬) 撃沈されたバルチック艦隊兵士を手厚くもてなした。とされる碑 (東郷平八郎書)

武本哲勇さん

吉野哲さん

小松津代志さん

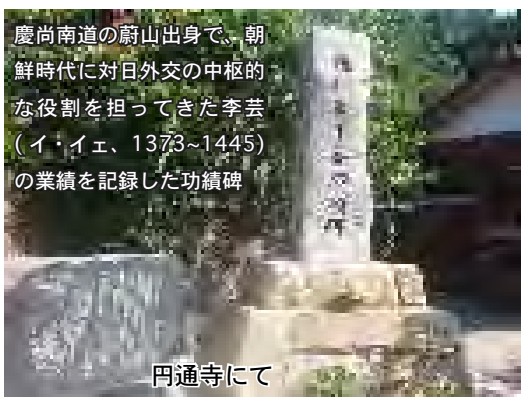


■豊砲台跡　昭和初期につくられた世界最大の砲台跡。

口径 40.6cm、砲身 18.5cm、重量は 103 トンもあり、戦艦「赤城」の主砲を据えたという。しかし実戦には発射されることなく、戦後解体された。

■上見坂公園に残る兵舎跡 頂上には砲台が据えられた跡もある。浅茅湾が一望できる。

半井桃水の生家跡にたてられた記念館を訪問


慶尚南道の蔚山出身で、朝鮮時代に対日外交の中枢的な役割を担ってきた李芸（イ・イェ、1373~1445）の業績を記録した功績碑

円通寺にて

「崔益鉉（チェイクヒュン）の殉国碑」(修善寺)
韓国を事実上日本の植民地にする「保護条約」に反対し義兵を起こし戦った韓国の愛国者。義兵の首魁として捕えられ対馬で獄死。

朝鮮を愛し追放された詩人・新井徹の記念碑（長寿院）

本名内野健児（1899 ～ 1944 対馬出身）。朝鮮詩集『土墻に描く』が治安妨害として発売禁止になった。